

続あやめ漫談 『行き詰りの突破口』

相模原市 清水 弘

〔最近の通販カタログ〕

某種苗会社の2015年通販カタログを見てショックを受けた。何とノハナショウブの1株1,200円に対し、新旧品種物（栽培品種）の平均単価が870円であった。この傾向はネット通販でも同様であったので、これが今日の園芸業界の中での花菖蒲栽培品種の位置付けであろう。

実は花菖蒲展示会でも江戸・伊勢・肥後系よりもノハナショウブや長井系に人気が集まる。また、筆者がある講演会で花菖蒲を紹介した際に、聴講者は江戸・伊勢・肥後の古花のスライドには反応せず、ノハナショウブや長井系の花に会場がどよめいた。古花は鎖国時代の各藩の中にだけ通じる価値観が表現された花である。これらをメールや留守録を使い、生身の人間と対峙することを嫌う現代の若者が見て『何だか堅苦しい』とか『威圧を感じる』となるのは当然である。一方、年長者は骨董的価値を説明するが、花菖蒲の花の命は二日半なのでTV番組のお宝鑑定人のように簡単には語れない。

〔大正時代のカタログ〕

最近、大正八年に吉野園が発行した「秋期特価提供種苗目録」を古書店より入手した。和物は牡丹・芍薬・花菖蒲だけで、バラ・チューリップ・ヒヤシンス・シラー・イキシア・クロカス・フリージア等々の秋植球根を主体とする洋種が満載されていた。洋種に負けずに牡丹、芍薬、花菖蒲が生き残って来たのは、花寿命の長い個々の花を楽しむというより、花の集団美を通じて四季を楽しむという日本人の心理があるからではないだろうか？人々は花菖蒲を通して我国の自然を楽しんでいるに違いない。生け花や茶道にも通じるこの点が今後、我国の花菖蒲界の進むべき一つの道を暗示している。

〔ノハナショウブの危機と活用〕

グローバル化という世界園芸の流れに対して花菖蒲界が立ち向かって行く場合、まずはこの国が持っているものと持っていないものとを整理して、そこから出発すべきであろう。多くの文化人が我国の財産として、人材の他に「米と水」を挙げている。花菖蒲界に限定するなら「ノハナショウブ」の存在であろう。ノハナショウブの分布は極東に限られおり稲作との関係が深い。内陸の沢田や谷戸田の畦畔に自生するノハナショウブの生態や景観は明らかに明治神宮御苑内の花菖蒲田の造景に通じている。

実は地球温暖化による積雪減少で湿原の乾燥化が起こり高山性のノハナショウブが減少している。また、低山のノハナショウブ自生地には栽培品種が植え込まれ遺伝子浸食を起こしている状況もある。いずれもそれなりの保護政策が必要であるが、私達愛好家ができることは、「遺伝子浸食を受ける前の自然変異遺伝子を残すこと、及びそれを活用すること」ではないだろうか。次頁に紹介する写真は日露で発見されたノハナショウブの変異体と筆者自身によるノハナショウブの変異遺伝子を取り入れた育成品種である。こういう試みにより花菖蒲品種がリニューアルされ、文化が継承されて行くことを期待する。

最後に、ある写真家が『外部を撮っていないながら自分の内面が撮影した写真に現れるのは、様々な外部の中に自分の内面と響き合う情景が潜んでおり、その情景を選ぶことにより自分の内面が自ずと表現される。』と言っている。我国の花菖蒲園で立派な花を咲かせ、そこに多くの外国人を呼び込みたいものである。果たして彼らはどんな写真を撮るだろうか。きっと新しい花菖蒲の美が発見されるであろう。



『蟹田白』 青森県自生地内の農家で栽培



『白頭鷲』〔ノハナショウブ×栽培品種〕×ノハナショウブ
*ノハナショウブの遺伝子を75%含む



『北野麗人』 青森県自生地で見



『白折鶴』〔栽培品種×ノハナショウブ〕F₂
*ノハナショウブの遺伝子を50%含む



『ロシア美人』 沿海州の自生地で見



『菖蒲丸』栽培品種×〔栽培品種×ノハナショウブ〕
*ノハナショウブの遺伝子が25%となる



『宮城野』 宮城県内自生地にて発見

【解説】

右列上3枚の写真の花は、筆者がノハナショウブと栽培品種を交配させたもので、栽培品種の遺伝子が多いほど、丸弁となって行くことが判る。なお『白頭鷲』は従来の栽培品種にはなかった配色パターン(逆二色)を持つもので、将来の発展が世界レベルで期待されるものである。